

第二章 光る源氏の物語 明石の姫君の裳着

[第一段 明石の姫君の裳着]

かくて(こうして、その裳着当日は)、*西の御殿に(にしのおとどに、西の町の寝殿に)、*戌の時に渡りたまふ(姫と源氏夫妻は夜の八時にお入りなさいます)。 *「西の御殿」は注に<六条院の秋の町の寝殿。>とある。只今の仲春の季節柄で「秋」は本文でも避けてあるようなので、言い換えも「西の町」とした。ということよりも、私は裳着会場が春の町の寝殿とばかり思っていたので、この文には驚いた。ということは、会場飾りの調度や装束布などは春の町の寝殿で用意してあって、当日に秋の町の寝殿に移して模様付けした、ということなのだろう。一先ず、そう置いて置く。 *「いぬのとき」は注に<午後七時から九時までの頃。主語は明石姫君。>とある。ただ、私はこの「渡りたまふ」の主語は殿だと思う。話の運びとして、先ず殿の動向を描写をして、その殿の意向に沿って以下に裳着の式次第が進むという劇構成に見える。とはいえ、確かにこの日の主役は姫であり、その入場は以下にも示されていないので、この文でそれを読むのも一理ある。で、それならいっそ与謝野訳文の「源氏夫婦と姫君」に従いたい。

*宮のおはします西の放出をしつらひて(中宮の御座所となる寝殿母屋西側の南庇を仮母屋に開け放った場所を裳着会場に施設して)、*御髪上の内侍なども(中宮付きの髪結女官なども)、やがてこなたに参れり(姫の髪結役を務めるためにこの六条院へ参上していました)。 *「宮のおはします」とあるが、中宮は何処に御座なさるべきなのか。中宮は皇后である。臣下と同列に座することはならない。特に式典に於いては、その地位の明示が政治そのものである。宮は母屋に座して臣下たる源氏殿以下は庇以下に座さねばならない。が、この裳着は義理とは言え妹君である明石姫の世間へのお披露目である成人式であり、庇で簡略に済ます事柄では無い。いや、それどころか源氏殿はこの裳着を「世の常ならず」と気張っているのであり、そのための中宮の里下がりでさえある。で、「放出(はなちいで)」を設営した、という言い方のようだ。ということは、「放出」は<飽くまでも臨時の設営だが、庇に畳を敷いて母屋の格式で使用する場合>と理解するべきなのだろう。ところで、春の町でも秋の町でも寝殿は南表で東西に長い筈だ。となると、「宮のおはします西」は<中宮が御座なさいます母屋西側>で、「の放出」は<その南庇を仮母屋に開け放った場所>で、「をしつらひて」は<を裳着会場として施設して>と、なりそうだ。後は書かれていないので勝手な憶測だが、では「東」は如何したのか、という疑問はある。多分、寝殿東側は控え室だ。式典での裏方の諸用意は必要な筈だが、秋の町は間借り状態なので、姫付きの女房たちは思うように北奥を使えない嫌いがあつたのだろう。 *「みぐしあげのないし」は<中宮付きの髪結女官>のことらしい。ただ、これも少しくせのある言い回しのようだ。「内侍(ないし)」は女官なのだろうが、正規の規定職名としての語用なのか、官費女房くらいの語感なのか、この「内侍」という語が何を示すのかは、この物語が王家の女房語りの所為か、その前提認識が不明で私には曖昧だ。が、取り敢えずは公務員では有りそうだ。だから、その内侍は中宮が御所から連れてきた、ということのようで、それが「こなたに参れり」と語られている意味、らしい。が、「やがて」とはどういうことなのか。「やがて」は現代語の<その内に、最後は>という意味とは少しく違って、古語では<そのまま、すぐに、すなわち>とあり、特に<とりもなおさず、ほかならぬ>と説明され<其れこそが其れ其のもの>みたいな意味で使われることもあるようだ。そう言えば、私の「裳着」の理解は「風俗博物館」サイトの「行幸巻の裳着の再現」ページの説明に全面的に依拠しているが、そのページの7番写真の解説に<裳着と同時に額の前髪を上げる「髪上」が行われる。正面に平額(ひらびたい、平たい飾り金具)という飾りをつけ、その下に櫛を挿し、笄(こうがい、髪挿し)・釵子(さいし)と呼ばれるピンのようなものでとめる。>とあり、この裳着式でも姫の「御髪上」をするワケで、その役目を「御髪上の内侍(中宮の髪結女官)」が務めることに成っていた、という文意

が見えてくる。だから、「御髪上」は職員と職掌の両方の意味で語用された洒落言葉になっているという仕掛けだ。驚くね。こちら、当時の習わしも知らなげりゃ、まして当時の女房語りの間合いも分からない。理詰めると、この一行にこの言葉数を費やす有様だ。

上も(紫の上も養母の立場で列席するべく見えていたので)、このついでに(四年前の六条院落成以来の春秋の競い合いの遊び相手でありながら、実は未だに会っては居なかったので、この儀式に同席するのを良い機会として)、中宮に御対面あり(中宮に御対面がありまして、)。御方々の女房(互いの女房たちが)、押しあはせたる(押し合わせた形になって)、数しらず見えたり(大変な賑わいでした)。「上」は注に<「上」は紫の上をいう。明石姫君の養母という立場。「このついで」とはその姫君の御裳着の儀式的折の意。初対面。>とある。確かに、現代語の「このついで」は軽い語感で、古語にある<正規の式次第に則った事柄>という意味を失っているように思う。その所為か、過剰に補語してしまった嫌いはあるが、この本文の「上もこのついでに」も、もしこの補語を文意に持つなら、簡素過ぎる書き方に見えるし、これ以外の文意なら、違う書き方をしないと、現に私がそうしている様に誤解を生む。

*子の時に御裳たてまつる(夜の十二時に、中宮が前紐を結び下さいまして、姫は御裳を着けなさいます)。*注に<中宮が腰結役を務める。>とある。ただ、「御裳たてまつる」に其れを客体動作とする尊敬語の「たまふ」が付いていないので、この「たてまつる」は姫が主語の「着る」の尊敬語で<着なさる>だが、折角の注の指摘だし、意味も重たそうなので然様に補語する。ところで、二年前の二月には対の姫の裳着があり、その際の描写には「亥の時にて(夜の十時に)、入れたてまつりたまふ(源氏殿は内大臣を会場の主殿母屋の御簾内にお入れ申し為さいます)。」(行幸卷第三章第四段)とあった。この時には内大臣が腰結役だったので、その時刻が裳着だったかと思うが、今回はざっと二時間遅い。前回の会場は春の町の寝殿で使い勝手が良く、今回は西に間借りしたので飾付けに時間が掛かった、ということの意味するのだろうか。何も書いていないので分からないのだが、「戌の時に渡りたまふ」とあったので、此处までに3~4時間あったとすれば、その間の主たる場面が上と中宮との対面を多くの女房が見守ったことだけなら、何だか間延びしている。

大殿油ほのかなれど(室内灯は薄暗いが)、御けはひいとめでたしと(姫の御姿はとても美しいと)、宮は*見たてまつれたまふ(宮は御見受け申しあそばします)。*「見たてまつれたまふ」の「たてまつれ」は、古語辞典に定説は無いとされるものの、尊敬語の「たてまつる」に尊敬の助動詞「す」の付いた語「たてまつらす」の連用形「たてまつらせ」の音便か、とも説明される。此处では宮への尊敬語なので、其の最上敬語の説明で納得しやすい。実際に、「たてまつらせたまふ」の「らせ」は巻き舌発音に成り易く思われ、「たてまつれたまふ」の方がまったりと上品に聞こえるような気もする。

大臣(殿は中宮に)、

「思し捨つまじきを頼みにて(お見捨てなさないことを願って)、*なめげなる姿を(失礼ながら、まだ不束な姫君の姿を)、進み御覧ぜられはべるなり(敢えて御覧頂いた次第です)。*後の世のためしにやと(宮の御臨席を賜わって、世に前例も無い我が家の名誉だと)、心狭く忍び思ひたまふる(感謝で胸が一杯です)」など聞こえたまふ(などを申し上げなさいます)。*「なめげ」は<ナメた感じ>みたいな言い方で<ナメ>は「無礼」とも表記され、現代語に近い気もするが、此处の「なめげ」は姫の形容だから<無礼な様=ふざけた風体>とは取れない。此处の「無礼」は<意図しないもの>で、故意ではなく過失の類かと思う。だから、至らない、ふつつかな、無礼があるかも知れない、くらいの言い方なのだろう。*「後の

世のためしにや」は<是が後世の前例になろうかと>という皇后を迎えてならでの仰々しい言い方で、宮の臨席を<無類の我が家の名誉>と喜ぶ。そして、「心狭く忍び思ふ」は<狭量にも密かに思う>という卑下した言い方で、宮に<胸一杯の感謝の気持ち>ことを示す。殿と宮との特殊な立場関係に基づく独特な言い回しなので、その言い方だけを言い換えても意味を表せない。これは逐語訳の限界を示す好例で、それは同時に原文が、この意味をこの場合には実際にはこんな言い方をした、ということを示す好例でもあるのだろう。

宮(中宮が)、

「いかなるべきこととも思うたまへ分きはべらざりつるを(腰結いなどという大役を、如何果たして良いかも存じませんでしたものを)、かうことごとしうとりなさせたまふになむ(そのように大層に仰って頂くと)、なかなか心おかれぬべく(却って気が引けます)」

と、のたまひ消つほどの*御けはひ(消え入るように小声でお応えなさる御品格の)、いと若く愛敬づきたるに(全く世擦れの無い朗らかさに)、*大臣も(中宮でさえ然様に養女としての親しみをお示しなさるこの場の御家族の、それを目指し自らもその一員である殿も)、思すさまにをかしき*御けはひどもの(理想通りに王家の趣きを御体現なさった方々が)、さし集ひたまへるを(今こそ一堂に会したことを)、*あはひめでたく思さる(上首尾と満足なさいます)。 *「おんけはひ」とあるが、放出の仮母屋内のことなので、御簾も無ければ取次ぎも無し直答だろうから、これは雰囲気から推量した<気配>ではなく、殿が実感した宮の<御品格>かと思う。 *この「おとども」は省略出来そうに見えるが、作者が敢えて記した意図や如何に有りや。特に「も」の語用が気になる。で、この文を見直すと、「宮」「の御けはひ」「いと若く愛敬づきたるに」「思すさまにをかしき御けはひどもの、さし集ひたまへるを」「大臣も」「あはひめでたく思さる」という構文になっている。ということは、文意の述辞として「大臣」が「めでたく思さる」のは、「あはひ(家族構成と首尾の複意語用)」だから、「愛敬づきたるに」の「に」を構文上の説明事項を示す格助詞と見て、この文意を<中宮が愛敬づいていたので>と解する読み方は出来ない、ことになる。つまり、文意からすれば「愛敬づきたるに」は<「愛敬づきたる。」「然るに」>であり、「に」は其の「然るに」の接続助詞たる「に」であると知れる。然らば、この「然るに」の「然る」は何を意味するのか。それは、「宮」「の御けはひ」「いと若く愛敬づきたる」ことが、「大臣」をして「思すさまにをかしき御けはひども」の中の一つの「御けはひ」と理解しうる価値概念である、という計算式の中に示されている。そして、この計算式における概念定数は「あはひ(家族)」である、と下に明かされている。従って、その定数値を「然る」に代入すると、この「然るに」は<中宮でさえ然様に養女として家族の親しみをお示しなさるので>を文意として持つので、「大臣も」の「も」は<その家族の一員である殿も>を意味する列挙の係助詞だと解明出来る。尤も、この文意自体は与謝野訳文に示されているし、考え方は然程複雑ではないと思う。にも関わらず、このノートは随分と言葉を労した。もし冗長に過ぎるとしたら、私としては作者の責にしたい。 *「御けはひども」は「みけはひども」と読みがある。これは、宮と上と姫、そして殿の御一家の方々<御品格>であり、それが「をかしき」というのは、宮の「いと若く愛敬づきたる」に言い表せられた<王家の品位>に違いない。 *「あはひ」はこの文の要諦となる語で<家族関係、家族構成>を示すと共に<間合い、首尾>を含意する。もしかすると、この文の分かり難さは、作者のこの語の便利さに頼り過ぎた洒落心の所為かも知れない。

母君の(実母である明石御方が)、かかる折だにえ*見たてまつらぬを(この実の娘の成人式であっても臨席が許されず姫にお目に掛かり申せないのを)、いみじと思へりしも心苦しうて(無念に思ってしまうのも心苦しくて)、参う上らせやせましと思せど(殿は御方をこの式に参列させてしまおうかとも御思いになったが)、人のもの言ひをつつみて(それによって姫の出自が受領腹であ

ることが、人の口に上るのを憚って)、過ぐしたまひつ(見送りなさったのです)。 *「見たてまつる」は母君が姫に<お目に掛かり申し上げる>という謙讓語で、身分社会における公的な縁故認証が血縁に優位するヒト組織の絶対的規律を示す。「ぬ」は打消しの助動詞「ず」の連体形だが、「たてまつる」こと自体が<献上を許される>意を持つので、その意を打消せば<献上出来ない>という文意になる。だから、此処の強意の「え」は<出来ない>ことを示すのではなく<許されない>ことを示していて、現代語では<出来る>と<許される>は分ける。さて、この文は平易に読んでも、上文に王家一族の華やぎを示したのだから、その対比で殿が明石君を同情するという趣きを感じさせるものではあるのだろう。然し、此処に常夏と撫子の姿、更には内大臣とその北の方の姿を重ね見ると、作者がこの物語でこの一文に込めた思いの深さを多くの読者はしみじみと感じるに違いない。

かかる所の儀式は(こうした高貴なお邸での実際の式次第は)、よろしきにだに(それほどでも無い貴人邸での式でさえ)、いとこと多くうるさきを(段取りが多くて煩雑ですのを)、片端ばかり(そのほんの一部を)、例のしどけなくまねばむも*なかなかやとて(例によってまとまりなくお伝えするのも却って失礼かと)、こまかに書かず(詳しくは書きません)。 *「なかなかやとて」などと言ったら、元々何も書けないだろうに。この文の真意は不明だ。何せ、こういう省筆の弁などなくても、作者は、この作者に限らず、自由に省筆していると思うが、これは臨席者の弁を模して臨場感を出す為なのか、何か別の意図があつてのことなのか、然し是は架空話の建前なので実際に臨席した上での率直さ、少なくとも其の素直な感想、などとはとても思えず、儀式を知ったかぶりをする者への当て付けか、仮に作者が自分は実は式次第に詳しいということはどうしても言っておきたかたに過ぎないのだとしても、だから其れなら其れなりに、何かしらの言いたいことはあつたのだろう。

[第二段 明石の姫君の入内準備]

春宮の*御元服は(とうぐうのごげんぷくは)、二十余日のほどになむありける(にじふよひのほどになむありける)。 *「御元服」は「ごげんぷく」と読みがある。「二十余日」は「にじふよひ」と読みがある。注には<東宮の御元服も同じ二月の二十日過ぎに行われた。「けり」過去の助動詞。儀式の終わった後から語るという語り口。>とある。第一章第一段の注に、春宮は<朱雀院の皇子、十三歳。>とあつた。

いと*大人しくおはしませば(皇太子はとても立派に成長なさっていらっしゃったので)、人の女ども競ひ参らすべきことを(有力家は其の娘たちが人に先んじて入内できることを)、心ざし思すなれど(目指そうと御思いなさるようだが)、この殿の思し*きざすさまの(源氏殿が姫の入内を考えて執り行いなさった明石姫の裳着式が)、いとことなれば(中宮を迎えるという異例の格式だったので)、なかなかにてや交じらはむと(他の姫君では、とても伍して出仕できそうもないと)、*左の大臣なども(左大臣なども)、思しとどまるなるを聞こしめして(姫の入内を思い留まりなさっているらしいのを御聞きになって)、 *「おとなし」は<おとなびている>とあり、「おとなぶ」は<おとならしくなる>とある。千日手か。それに第一、皇太子は元服したのだから成人であり、既に「大人」ではないか。それに、また第一、入内は権力抗争なのだから、皇太子がどんなに幼い子供であつたとしても、有力家は其の子女を妃にしようと育てるのであり、正に明石姫も源氏家の「后がね」として育てられて来た。いや然し、権力抗争だからこそ、元服した皇太子が将来有望かどうかは、有力家にとっては最大の関心事には違いない。そうか、ということは、この「大人し」は<将来の活躍が楽しみなほど立派に成長した>という意味なのだろう。 *「きざす」は「兆す、気差す」とあり<意図を持って何かを始める→何かを意図した物事が起こる>と説明される。その「物事」は明石姫の<御裳着>だろう。ということは、此処の「思し」は<姫の入内を考えなさって>だ。 *「ひだりのおとど」は注に<

系図不詳の人。「行幸」「真木柱」に登場。>とある。行幸巻第一章第一段では、帝の大原野の鷹狩り行列の盛大さを描写する場面に、「行幸といへど、かならずかうしもあらぬを、今日は親王たち、上達部も、皆心ことに、御馬鞍をととのへ、隨身、馬副の容貌丈だち、装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下はた、まして残らず仕うまつりたまへり。」と、引き立て役とは言え内大臣より上位格で紹介されていた。真木柱巻第四章第一段では、対の姫が尚侍君として参内した時の局を説明する際に、その時点でのおよその後宮住人が示されていて、「中宮、弘徽殿女御、この宮の女御(此処の承香殿の式部卿宮姫の女御)、左の大殿の女御(左大臣家姫の女御)などさぶらひたまふ。さては(その他の身分の劣る更衣としては)、中納言、宰相の御女二人ばかりぞさぶらひたまひける。」と、今上帝の第四妃の父君として名が出ていた。

「いと*たいだいしきことなり(実に不届きな怠慢さだ)。 *「たいだいし」はくなおざりである。不都合である。怠慢である。軽率である。もつてのほか。>と古語辞典にあり、漢字表記は「怠怠し」とされているが、大辞泉と大辞林にはこの漢字表記はなく、原義に定説はないとされ、意味にもく怠慢である。>は説明されていない。ただ、此処での文意はく切磋琢磨を怠ることを危惧する>ようなので、「怠怠し(怠慢に過ぎる)」は説得力が有る説明ではある。また、この言い方が公式なもの、ないし其れに準ずる官僚言葉で、市中では使われなかったら「戴戴し(畏れ多くも不届きだ)」という語感かも知れない。その辺を見当して、この場の語意を汲みたい。

宮仕への*筋は(宮仕えに対する正しい考え方は)、あまたあるなかに(多くの選りすぐりの役所職員どもの中にあつて)、すこしのけぢめを挑まむこそ本意ならめ(各位が少しの優劣を競い切磋琢磨することこそを本分となすことなのだろう。何故なら役所は予算執行および組織動員力を付託された統治機関なので、その権力責任を果たすべき精鋭が実際に最上を目指すことで国家の繁栄が期待できるのだから)。 *「筋」は<道筋、理屈>で、太政大臣が「宮仕え(役所仕事)」について道を説くということは<役人の心構えに付いて正しい考え方を示す、説明する>ということだ。尤も、此処では「宮仕え」は<入内>を意味しているので、後宮での帝妃たちによる皇后の座の競い合い、を殿は話題にしている訳だが、原理としては国家統治論だろうと思うので、面白がって理屈を補語した。ただ、殿が何処までこの理屈を本気で言っているのかは量りかねる。中宮に腰結いをして貰うという、将来の后位に圧倒的に優位な明石姫の立場、という余裕があつてこそその殿の弁、という側面は確かにあるのだろう。しかし、だからといって対抗馬が出場を取り止めた上での不戦勝では、姫を此処まで磨き上げてきた甲斐がない。当て馬が居てこそ主役は引き立つ。その気持ちは次の文で明示されているとも思うが、であれば逆に、負けると分かつていて可愛い愛娘を当て馬に差し出す公卿は居ないだろう。いや、だから、競争相手は必ずしも負けと決まったワケではないのだ。確かに、皇太子が即位した際の皇后候補としては源氏姫は圧倒的に優位だ。が、妃は子供を宿す。そして親王の実勢は、その母方の実家の権勢に支えられる。その子が立太子すれば、今の春宮の母君がそうであるように、皇后の地位を逃しても、やがて春宮の御即位に伴って、自身は母后・太后となり、実家を摂関家の地位に布陣させることが出来る。だから、源氏殿にとって不戦勝は実利を考えれば然うも高を括れず、決して本心から望まないと言い切れるものでもなさそうだ。「筋」は太政大臣としての見識だろうか。それとも宮びたる殿の王朝観だろうか。ただの遊び心だろうか。

*そこらの*警策の姫君たち(多くの栄えある姫君たちが)、引き籠められなば(家に引き籠められたならば)、*世に映えあらじ(世の中に華やぎが無くなってしまう) *「そこら」は「幾許」と表記される。「幾許」は「いくばく、いかばかり」という言い方なら現代語でもく幾つと数は言えないが少なくはない量>という意味で使う。古語でも「幾許」は同様に<多くのもの、大量にあるもの>を示すらしいが、この「幾許」はくそこら、そこば、そこばく、ここら、ここば、ここらく、いくだ、こくばく>などと幾つもの言い方があり、それが漢文の読み方の違いなのか、各々が語源由来からして違うものなのか、何が違うのか違わないのか、良く分からな

い語だ。 *「警策」は「きやうざく」と読みがありく馬にあてる策(むち)に意から転じて、人を驚かせるほど立派なこと。優れていること。 >と古語辞典にある。「優れている=栄えある」としたが、姫君たちを競走馬に見立てた語感はあるようだ。 *「世に映え」はく世の中の華やき>と解する。「世の中の華やき」は消費の拡大による景気刺激効果が期待できるし、それによってもたらされる文化の発展は豊かな生活に寄与する。とまあ、決して銀行レースの当て馬探しなどではなく、大臣らしい政治発言と受け止めて置く。

と*のたまひて(と公言なさって)、御参り延びぬ(姫の入内は延期になりました)。 *「のたまふ」は、「聞こえたまふ」が同位者や上位者にく申し上げなさる>のとは違って、下位者にく話し聞かせなさる>ということのようで、ということは、大臣として所信表明を公言したのだろう。

次々にもとしづめたまひけるを(大臣以下次々と公卿たちが各姫の東宮参内を自粛なさっていたが)、かかるよし所々に聞きたまひて(太政大臣のこうした意向を各方面に確認なさって)、左大臣殿の三の君参りたまひぬ(左大臣家の三番目の姫君が春宮に参内なさいました)。麗景殿と聞こゆ(麗景殿女御と申されます)。

この御方は(こちらの源氏姫の御部屋は)、昔の御宿直所(昔の殿の御宿直部屋の)、淑景舎を改めしつらひて(淑景舎を改装なさって)、御参り延びぬるを(参内が延期となってしまったのを)、宮にも心もとながらせたまへば(春宮におかれても待ち遠しく御思いあそばすので)、四月にと定めさせたまふ(四月の参内とお決めなさいます)。

*御調度どもも(御調度類も)、もとあるよりもとのへて(前の物とは入れ替えて)、御みづからも(殿御自身からも)、*ものの*下形(その新しい道具類の概要を)、絵様などをも御覧じ入れつつ(描図したものなどまでお示しなさって)、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて(各技量に優れた職人たちを呼び集めなさって)、こまかに磨きととのへさせたまふ(丹念に美しく仕上げさせなさいます)。 *「御調度ども」は「おんでうどども」と読みがある。 *「もの」はく道具類>なのだろうが、新しく作り変えるようなのでくその新しい道具類>。 *「下形(したかた)」はくひながた。設計図など。 >と古語辞典にある。が、殿が模型製作までしたとは思えないので、およその用途に応じた形の考案くらいだろう。で、「絵様(ゑやう、図案)」が其の大体の形を素描したものだろう。

*草子の管に入るべき草子どもの(本箱には仕舞って置くものを)、*やがて*本にもしたまふべきを選らせたまふ(必ずや姫の手習いの手本になさるべきものをお選びなさいます)。いにしへの*上なき際の御手どもの(昔の最高水準の書家たちの手による)、世に名を残したまへるたぐひのも(有名な写本類も)、いと多くさぶらふ(それは沢山御座います)。 *「草子(さうし)」はく漢籍・和本などで、紙を綴(と)じ合わせた形式の書物。綴じ本。 >とかく物語・日記・歌書など、和文で記された書物の総称。 >とかく御伽(おとぎ)草紙・草(くさ)双紙など、絵入りの通俗的な読み物の総称。 >とかく習字用の帳面。手習い草紙。 >とかく書き散らしたままの原稿。 >などと大辞泉にある。いずれにしても、当時は印刷製本は無いので草子は全て写本であり、「管(はこ、保存箱)」に整理するほどのものなら其れなりの綴じ本ではありそうだが、その実物概要を私は知らない。 *「やがて」はくそのうち>ではなくく正に其れこそが>だ、と何度もノートしている。 *「本(ほん)」は製本ではなくく手本>。 *「上なし(かみなし)」はくうえがない。最上。最高。 >とある。「際(きは)」はく評価上の一分類、一定水準>。で、「上なき際」はく最高水準>。

[第三段 源氏の仮名論議]

「よろづのこと(万事が)、昔には劣りざまに(昔には劣って来ているようで)、浅くなりゆく世の末なれど(味わいが浅くなるばかりの世の末だが)、仮名のみなむ(仮名文字だけは)、*今の世はいと*際なくなりたる(現代が実に活気付いている)。 *「今の世」とは源氏殿にとっての「今の世」だから、この物語が昔語りの設定なので、作者の執筆時(一条期)よりは数御世前(村上期で約 50 年前、醍醐期で約 100 年前)の仮名文字変遷事情の学説を作者が文章博士女として展開しているのかということ、その学説を客観評価できるほど文字変遷事情に通じた読者が居たとも思えず、作者自身も厳密な傍証態度にも見えず、本質的に当物語は執筆当時の多くの宮廷読者が共通認識していた過去の有名人評価を頼りにした架空設定の現代劇だろうから、「今の世」は作者の執筆当時の「今の世」として当時の読者が面白がって読んだ、と見るべきなのだろう。とは思うが、執筆当時とその数御世前における仮名文字変遷の実情を何れにしても私は知らないし、其処に今現在殊更に肉薄したいとも思わない。ただ、次にある「いと際なくなりたる」という見慣れない表現の意図が分からず、実情は知らないながらも、当時は仮名文字変遷の激動期だったのかも知れないと想定はしてみる。そして、仮名文字が日本語で、特に書物での分かり易さに於いて、決定的に重要な役割を負っていることを思うと、日本人の契約概念と其れに基づく社会秩序構成の根幹をこの時代が構築した可能性に、改めて感慨を覚える。そして、此処の話が当時のルポとして、その空気感の一部でも現代に伝えてくれるとしたら貴重な資料かも知れない。 *「際なし」は前にあった「上なき際」を略した言い方だとすれば<今が最高水準>という文意に見える。しかし、「際なし」の本来の意味は<際限が無い=何処が果てなのか見分けられない=評価が定まらない>であり、其れは即ち其の事態が<膨張している、成長している>ことを意味するのではないか。先読みは不本意ながら、評価が定まっていないから作者は興に乗って、下文にあるように、この話題を引っ張ったに違いない。もし、評価が定まっていたのなら此処の文の「劣り様に浅し」の対語は「優り様に深し」だ。むしろ文意は、「(浅く)なりゆく」に対して「(際なく)なりたる」という事態の動向の方に言及しているのだろう。そのように言い換える。

古き跡は(古い筆跡は)、*定まれるやうにはあれど(一応は其れなりの形に落ち着いているようではあるものの)、広き心ゆたかならず(漢字の簡易表記が主眼で、独自の表音文字としての認識は不十分で)、一筋に通ひてなむありける(元の漢字の形に捉われた手本通りに似せて書いてあるだけで、工夫が足りないようだ)。 *「定まる」は<決定する。落ち着く。>と古語辞典にある。が、何のことを言っているのか分からない。で、「広き心ゆたかならず(自由度が少ない)」と「一筋に通ふ(一つ覚え=誰かの手本を真似るだけで独自の工夫だ無い=工夫するだけの素養が無い=勉強が足りない)」という説明に反しない事情を推測するに、この「定まれる」は<初期の平仮名は表音文字として漢字の崩し方や省略の仕方に其れなりに一定の共通認識が広まって形が定まってきた>という意味に見える。が、初期ゆえの試行錯誤で、結局は元の漢字を知る者同士の略字使用による簡便さの認識を離れず、独立した表音文字としての自由な使用が未だ広く認識されておらず、その為の突き詰めた研究も足りない、という文章家ならではの鋭い指摘のようだ。

*妙に(たへに、美しく)をかしきことは(面白い字は)、*外よりてこそ書き出づる人びとありけれど(最近になってこそ書き表す人たちが出て来たが)、女手を(をんなでを、仮名文字を)心に入れて習ひし盛りに(熱心に習っていた最中に)、こともなき手本多く集へたりしなかに(特徴の無い手本が多く集まっていた中で)、中宮の母御息所の(中宮の母君である故六条御息所の)、心にも入れず走り書いたまへりし(何気なく走り書きなされた)一行ばかり(ひとくだけりばかり、一文章ほどの)、わざとならぬを得て(気負いの無い写本を手に入れて)、際ことにおぼえし*はや(格別に優れていると感じたものですから、)。*さて(それに心惹かれて私が言い寄ったことで)、あ

るまじき御名も立てきこえしぞかし(未亡人とは言え叔父宮夫人には、あるまじき御浮名をも立て申してしまったのかも知れません)。*「妙」は<巧妙=技巧に優れる>や<妙案=視点を変えた良案>のように<意外性のある説得力>を感じさせる語だが、此处では「をかし(面白さ)」は別に記されているので<意外性>よりは<説得力=見事さ=字の美しさ>と解す。*「外」は「と」と読みがあるが、古語辞典には「とよる(と寄る、より近付く)」という動詞として説明があり<「と」を「外」とする説もあるが未詳>と補説もある。この「と」は「とばかり」の「と」と同じで、格助詞「と」の名詞的ないし副詞的語用のように説明されるようだ。格助詞「と」には確かに<何かと何かとの距離感>や<基準値との対照比較>を示す語感がある。是が「(古きよりは近きへ)と寄りてこそ」なのだとしたら、分かり易い文だ。*「はや」の「は」を強調の係助詞、「や」を感嘆詞と見て、此处を文落の<(覚えし、感じた)ものだ>という読み方を校訂はして在るようだが、下文を「ぞかし(そうってしまったのかも知れない)」という説明叙述を受けた一結論を示す構文にしてあるので、この「はや」はその構文中の説明叙述に位置付けられる。抛って此处を文落とは出来ず、「はや」の「は」は接続助詞で「や」が係助詞と見る他はなく、文意は<(覚えし、感じた)ものだから>として以下に結論を待たねばならない。*「さて」は注に<源氏は、御息所の筆跡の見事さに引かれて恋するようになったと、紫の上を前にしていう。>とある。さて、この「さて」の「さ」が然様に直前の話題を引き受けるのは、実に此处の「さて」が文中の接続詞ないし副詞だからこそだ。文頭の「さて」は、それまでの文脈総体を受けるか、受け流すかで、詰まりは話題転換を示す接続詞だ。ところで、「紫の上を前にしていう。」は少し意外な指摘だった。確かに、そういう場面ではありそうだが、であれば、此处は六条院の文殿あたりが舞台なのだろう。ということは、「草子の管に入るべき草子どもの～」という文がこの段の始まりであるべきで、其処の注に<舞台は六条院文殿に移る。>とでもあれば親切かと思う。

悔しきことに思ひしみたまへりしかど(御息所は私との縁を過ちと深く後悔したまま亡くなったが)、さしもあらざりけり(そんな悪運ではなかったのだ)。宮にかく後見仕うまつることを(中宮に私がこうして世話役として御仕え申上げていることを)、心深うおはせしかば(思慮深くいらしたので)、亡き御影にも見直したまふらむ(位牌の蔭から見直して下さるだろう)。「くやしきこと」は源氏殿が厚く待遇しなかったことへの<御息所の恨み>なのだろうか。確かに、御息所は源氏殿の冷遇を恨んでいた。若き日の光君は御息所の教養に憧れ、その美貌と床あしらいに宮美の極致を見た。が、それを独りで背負うには光君は若過ぎたし、御息所は重過ぎた、のだろう。光君は紫君の若さと程良い宮美に安らぎを求めた、ようだ。が、「くやし」は<残念な思い、無念さ>であり、他人への<恨み>もあるかも知れないが、それだけではなく、特に御息所は自意識の高さも有って、光君の足の遠退きを寂しいと表すことも出来ず、むしろ自分が光君と縁を結んでしまったことを<過ちとして後悔する>気持ちが強かった、ように思う。是は、濔標巻第五章の臨終の場面だけでなく、非常に不思議な印象だった夕顔巻の「六条わたり」の語りから、次第に素性が明かされて、遂に葵巻で葵の上一行との「御車の所争ひ」が起こり、後は悲運の内に没した、という作者の御息所の強い性格付けに拠る。だから此处でも、その御息所の自尊心を汲んで置きたい。

宮の御手は(中宮の御手筋は)、こまかにをかしげなれど(丁寧で美しいが)、かどや後れたらむ(工夫が足りないようだ)」

と(と殿は上に)、うちささめきて聞こえたまふ(声を潜めて申しなさいます)。

「故入道宮の御手は(故藤壺中宮の御筆跡は)、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど(とても深みのある字体ですらすらと書き進んだ手の運びはあるものの)、弱きところありて(弱弱しきがあつて)、にほひぞすくなかりし(華やかさが足りない)。

院の*尚侍こそ(朱雀院の秘書室長こそ)、今の世の上手におはすれど(現役の上達者でいらっしやるが)、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる(少し洒落心が過ぎて崩れも出ている)。さはありとも(そうであっても)、かの君と(その室長と)、前齋院と(さきのさいみんと)、*ここにとこそは(あなたとこそは)、書きたまはめ(能くお書きなさるようだ)」 *「尚侍」に「かんのきみ」と読みがある。平仮名に漢字を振ったのならく尚侍の君>であり、「尚侍の君」を「ないしのかんのきみ」と読むのは正しいが、「尚侍」を「かんのきみ」と読むのは本来は間違いだろう。院は御所とは独立して内侍所(秘書室)を持っていたらしい。実務は、院に本来は政務が無いのだから、書類業務ではなく、官費女房だったのだろう。 *「ここ」は話し相手のくあなた>。即ち、紫の上。

と(と殿が)、*聴しきこえたまへば(おだて申しなされば)、 *「聴す(ゆるす)」はく聞き入れる→許可する、認める>という意味らしいが、また殿の地位や見識の高さからしてそうした語感もありそうだが、此处ではく気を緩めて和む→調和する→相手の機嫌を取る→褒める→おだてる>くらいの私的な会話と取りたい。他の貴人にも敬語を省いているので、公人としての慎みに欠ける。

「この数には(そんな方たちと一緒にでは)、まばゆくや(気が引けます)」

と聞こえたまへば(と上がお応えなさり)、

「いたうな過ぐしたまひそ(そんなに謙遜なさいますな)。にこやかなる方のなつかしきは(にこやかな点での好ましさは)、ことなるものを(格別ですからね)。*真名のすすみたるほどに(また、男手では漢字が上手になると)、仮名はしどけなき文字こそ混じるめれ(仮名は雑な書き方が多くなるようですね)」 *「真名(まな)」は仮名に対する元の字のく漢字>で、崩した草書に対してはく楷書>も意味する、とのこと。注にはく漢字と仮名文字を用いる男性への一般論。「ほどに」を、『集成』は「すればするだけ」の意に、『完訳』は「するわりには」の意に解す。>とある。

とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて(白紙の綴じ本を作り加えて)、表紙(へうし)、紐など(ひもなど)いみじうせさせたまふ(特別上質にさせなさいます)。

「兵部卿官、*左衛門督などにもものせむ。 *「左衛門督(さゑもんのかみ)」は注にくここだけに登場する系図不明の人。>とある。ただし、少女巻第五章第二段の大宮邸に二姫を迎えに来た大臣家の君達を紹介した行の序でに、大宮腹ではない大臣の弟として「左兵衛督」に言及があったが、その際の注釈に其の人物をく「左兵衛督」は大島本の独自異文。他の青表紙本の多くは「左衛門督」とある。>とあったので、源氏殿とは旧知の筈の内大臣の弟君である可能性は高い。というのは、「左兵衛督」は藤袴巻ではく式部卿官の子息。源氏の北の方紫の上の異母兄弟。>と説明されていたからだ。「ものせむ」はくものにさせよう=作らせよう=写本を書いてもらおう>。

みづから*一具は書くべし(私も上下物一揃えは書こう)。*けしきばみ*いますがりとも(御二方は筆上手として自信を見せていらっしやるが)、え書き*並べじや(私もその出来栄えに引けを取りはしないだろう)」 *「一具」は「ひとよろひ」と読みがある。一式のくひとそろい、一揃い>とのこと。訳にはく二帖>とあるが、上下物で二冊、ということだろうか。 *「けしきばむ」はくそれらしい様子が表に現れる>とのことで、此处では書道の腕比べが話題なので、名前の上がった方々はそれなりに評判の高い人たちだろうから、その自負を表すとは即ちく自信を見せる>。 *「いますがり」は「在り(あり、居る)」「居り(をり、～している)」の尊敬語でくいらっしやる。おいでになる。>と古語辞典にある。 *「並べじ」の「並べ」は古語辞典に拠ると、「並ぶ(匹

敵する)」の他動詞の<(書き=写本の出来栄え、を)匹敵させる>という語のバ行下二段活用の未然形で、自動詞の<(自分の書き腕が)匹敵する>はバ行四段活用で未然形が「並ば」となるので違う、ということらしい。「じ」が否定意志の助動詞らしいことは見当が付いたが、「並ばじ」と「並べじ」の違いは辞書を引くまでが分からなかった。

と、われぼめをしたまふ(自慢なさる)。

[第四段 草子執筆の依頼]

墨(すみ)、筆(ふで)、並びなく選り出でて(最上の物を添えて)、例の所々に(そうしたいつもの心当たりの先々に)、ただならぬ御消息あれば(折り入って姫の手本すべき写本作成の御依頼文が殿から寄せられると)、人びと(方々は)、難きことに思して(難しいことに御思いなさって)、返さひ申したまふもあれば(御辞退申しなさる人も居るので)、まめやかに聞こえたまふ(殿はまめに何度もお頼み申しなさいます)。

高麗の紙の薄様だちたるが(高麗製の輸入紙の薄様のように光沢のある薄手のものが)、せめてなまめかしきを(非常に風合いが良かったので)、

「この(この機会に)、もの好みする若き人びと(今を盛りと色気づく有望株を)、試みむ(競わせてみよう)」

とて、宰相中将(子息の中将)、*式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに、 *「兵衛督」は「左兵衛督(さひやうゑのかみ)」で、右大将と結婚した対の姫に失恋した者の一人として、藤袴巻第三章第二段注に<式部卿宮の子息。源氏の北の方紫の上の異母兄弟。>と紹介されていた人なのだろう。「若き人びと」とあり、宰相中将 18 歳、頭中将は 24 歳くらいかと思うが、この兵衛督は何歳なのだろう。式部卿宮は四年前の秋八月の落成直後の六条院で五十歳の祝いを挙げて貰ったのだから今年で 54 歳だ。紫の上は今年で 31 歳になった。男は妾腹の子なら 50 歳でも 60 歳でも子を設けられるが、紫の上の腹違いの正室腹の姉が右大将の前の北の方で今年で 39 歳の筈なので、この兵衛督が同じ正室腹なら当時の宮姫の出産年齢を 18~28 歳くらいと見て、紫の上より年上か、年下でもせいぜい 28 歳くらい、督であればやはり 30 代が妥当に思えるが、「若き」は悩ましい。

「*葦手(あしで)、*歌絵(うたゑ)を、思ひ思ひに書け」 *「葦手」は古語辞典に<平安時代に行なわれた文字のたわむれ書き。>とあり、参照図絵もあり、例えば「ふ」を飛ぶ鳥の絵のように描いて、歌の文字で絵を描く、とか、水の流れや水辺のアシ草を施した絵に歌の文字を紛らわす、とかして遊んだらしい。平仮名は曲線なので絵や絵の一部には見立てやすいので、その真似事ぐらひは私も子供心に遣った気がする。 *「歌絵」は<和歌の内容を表現した絵。平安時代に流行。歌を書き添えてある場合が多い。>と大辞泉にある。水辺の風情を詠んだ歌なら、葦手と重なるものもありそうだ。

とのたまへば(と殿が仰ると)、皆心々に挑むべかめり(皆競い合って取り掛かったようです)。

*例の寝殿に離れおはしまして書きたまふ(薫物合わせの時と同じように殿は寝殿に上とは離れなさって写本なさいます)。 *「例の」は薫物合せの時と同様にの意。と注にある。確かに、「例によって」と言ってしまうと、いつも殿が一人で寝殿に籠もっているような印象の文になる。しかし、作者は敢えてそうした印象を読者に与えようと意図した、という可能性もある。二条院では、東の対が光君の住まいで、西の対が紫の君

の住まい、とはっきり分けられ、それはそれで夫婦にしては一体感を欠く印象もあったものの、そういう生活感を作者は描いていたし、明石姫を引き取ってからは、姫の部屋を寝殿の「西表をことにしつらはせたまひて、小さき御調度ども、うつくしげに調へさせたまへり。」(薄雲巻第一章第五段)として、紫君が母親役を担う事にはなり、「上」の呼称にもなったが居室は変わらず、「乳母(宣旨の娘)の局には、西の渡殿の、北に当れるをせさせたまへり。」(薄雲巻第一章第五段)という配置で、姫君が幼少(3歳の12月)ということもあってか、実際の姫の世話は乳母が主だったような書き方だった。が、その四年後の姫が7歳の秋に六条院に移ってからは、殿と上と姫は春の町の寝殿でより一体的な家族として暮らしていたかの印象だ。それでも当時の貴家のことだから、西側が姫の部屋、東側が上の部屋、とそれぞれの女房勢の独立性は高く、その意味では殿の女房は東の対屋に控えていたように私は勝手に考えていて、それでも殿は基本的には上の母屋で居住しているように思っていた。いや、そのことについて明示は無く、その明示が無いことへの不満も何処かにノートした気もするが、およそそうした印象で此处までは破綻無く読めていたし、一体的に暮らしていたからこそ、此处で「寝殿に離れおはしまして」とわざわざ書いたように私は受け止める。そして、二条院でなら殿が「離れおはしま」すのは東の対の筈なので、この六条院では殿が「寝殿」で上が「東の対」ということも、仮にそれが一般的には普通のことだとしても違和感を感じる。だから、それだけに、この「例の」や前章での「対の上」という言い方が意外性を持って聞こえる。この作者は、それまでとのちょっとした言い違えで、ということは作者自身には既に場面転換が意識されていて、語りとしては後から場面転換が明かされて、読者としてはその事前説明の無さに戸惑うことになる、ということが多い気がする。だから、嫌な予感がする。

*花ざかり過ぎて(桜の花も散って)、浅緑なる空うららかなるに(葉の緑だけになった晩春の暖かさに)、古き言どもなど思ひすましたまひて(古い詩歌の数々を味わって選びなさり)、御心のゆく限り(それに相応しい表現として)、草のも(草書や)、*ただのも(楷書や)、女手も(平仮名を)、いみじう書き尽くしたまふ(見事に書き上げなさいます)。 *「花ざかり過ぎて、浅緑なる空」は注に<「花」は桜の花。晩春の景色。>とある。葉桜の頃になると寒気も抜けて暖かくなる。そういう「うららか」さ、なのだろう。四月の入内を前にした三月中頃のことだろうか。旧暦は1~2ヶ月早いから、今だと四月の下旬とは如何にも晩春だ。これは部屋から庭を見た外の様子らしいから、庭は南庭で殿は寝殿の東面の南庇で写本をして居る、という描写なのだろうか。 *「ただの」について、注には<「女手(平仮名)」との相違がはっきりしない。>とある。が、兵部卿宮や左衛門督に写本依頼をする理由に「真名のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそ混じるめれ」とあったので、この「ただの」は「草の」に対する普通の「真名」と見たい。

御前に人しげからず(御側に従者は多くなく)、女房二、三人ばかり(にようぼうふたりみたりばかり)、墨など擦らせたまひて、*ゆゑある古き集の歌など(由緒ある古い歌集の歌など)、いかにぞやなど選り出でたまふに(姫の為の写本に適したものを選び出しなさる助けに)、口惜しからぬ限りさぶらふ(不足の無い者だけが仕えます)。 *「ゆゑあるふるきしふのうた」とは万葉集(750~800年頃成立)や古今和歌集(913年頃成立)のことなのだろう。「ゆゑある」は勅命を意味するとすれば、万葉集も勅撰和歌集ということで、そうでなければ在り得ないほどの質量らしいが、何しろ写本である限りは客観的な完成形を見定めること自体が難しそうだ。

御簾上げわたして(居間の御簾を皆巻き上げて)、脇息の上に草子うち置き(脇休めの上に綴じ本を打ち置いて)、端近くうち乱れて(縁側近くにくつろいで座し)、筆の尻くはへて(筆の尻を咥えて)、思ひめぐらしたまへるさま(考えを回らしていなさる殿の姿は)、飽く世なくめでたし(本当かと思飽きないほど美しい)。

*白き赤きなど(特に白かったり赤い色紙などの)、*掲焉なる枚は(目立つ枚数目の紙に書く時には)、筆とり直し(筆を取り替える)、用意したまへるさま*さへ(用意をしていらっしやることだけを見ても)、見知らむ人は(写本に心得の有ろうという者なら)、げに*めでぬべき御ありさまなり(なるほどと感心せずには居られない殿の御熱心さでした)。*「白し」は、漂白しない手漉き紙は多く茶色がかってはいそうだから、その中でも<特に白い上質紙>だろうか。「赤し」はどのくらいの風合いなのか分からないが、着色した色紙なのだろう。*「掲焉なる枚」は「けちえんなるひら」と読みがある。「けちえん」の「掲」は<公開>を意味し、「焉」は<明示>を意味して、つまり<公示する=注目させる=目立たせる>。「ひら」は<薄い一面>とあり、綴じ本ならその一頁。で、「けちえんなるひら」は<目立つ枚数目の紙>。と言っても、その綴じ本の実体は私には丸で分からない。*「さへ」は<までも(他の事に加えて)>ではなく<だけでも(その事だけを見ても)>という文意。*「めでぬ」の「ぬ」が結果認識の助動詞なのか否定の助動詞なのか分かり難い、と思ったら、「愛づ(ダ行下二段活用)」が現代語では「愛でる(ダ行下一段活用)」になっている所為だった。「愛づ」なら「愛で(ぬ、感心してしまう)」は連用形に付いた「ぬ」なので結果認識であり、否定なら連体形に付く「愛づ(ぬ、感心出来ない)」なので間違う筈がない。らしいが、私には何れ、いや何れも、分かり難い。

[第五段 兵部卿宮、草子を持参]

「兵部卿宮渡りたまふ(兵部卿宮がお見えになりました)」と聞こゆれば(と女房が知らせたので)、おどろきて(殿はオッと気持ちを切り替えて)、御直衣たてまつり(上着を着直しなさり)、御茵(おんしとね、宮用の御座布団を)参り添へさせたまひて(用足しさせ為さって)、やがて待ち取り(その南面の廂で待ち受け)、入れたてまつりたまふ(宮を招き入れ申しなさいます)。

この宮もいときよげにて(この宮もとても美しい姿で)、御階(みはし、南庭から車を寄せて正面階段を)さまよく歩み昇りたまふほど(背筋を伸ばして上りなさる様子を)、内にも人びとのぞきて見たてまつる(西側の上げていない御簾の内側から女房たちが拝し申し上げます)。

うちかしこまりて(畏まって会釈して)、かたみにうるはしだちたまへるも(互いに礼儀正しい挨拶をなさるのも)、いときよらなり(親しい御兄弟とは言え、とても清しいものです)。

「つれづれに籠もりはべるも(是と言って用も無く家に籠もっておりますのも)、苦しきまで思うたまへらるる心ののどけさに(退屈に過ぎると存じられます暇を持て余し気味の所に)、折よく渡らせたまへる(折り良くお越し下さいました)」と(と殿は)、よろこびきこえたまふ(宮を歓迎申しなさいます)。

かの御草子待たせて渡りたまへるなりけり(宮は依頼された写本を供人に持たせてお見えになったのでした)。やがて御覧ずれば(殿が直ぐに御覧になると)、*すぐれてしもあらぬ御手を(余り難しくない平易な御字を)、ただ*かたかどに(少しも力み無く)、いといたう筆澄みたるけしきありて書きなしたまへり(実にまたすつきりとした出来栄えで書き仕上げなさいました)。歌も(お選びになった歌も)、*ことさらめき(それに相応しい)、そばみたる古言どもを選りて(率直な言葉遣いばかりが集まった古歌たちを選んで)、*ただ(ちょうど)三行(みくだり)ばかりに(づつに揃えて)、*文字少なに好ましくぞ書きたまへる(漢字が少なく読みやすくお書きになっていらっしやいます)。大臣、御覧じ*驚きぬ(殿はその心配りを御覧になって驚きました)。*「すぐ

れてしもあらぬ御手」は「特に然程でもない字」という言い方のようで、何が「然程」なのかは「やがて本にもしたまふべき(必ずや姫が手本にもなさるべき)」という冊子作成の目的からして、まだ11歳の姫君にも分かるような、余り由緒が難解ではなく、作りが凝っていない平易な字、なのかと思う。*「かたかど」は「片才」と表記され「わずかな才能。」と古語辞典にあるが、是は宮が「わずかな才能しかない」のではなく「少しだけ才能を見せた」という言い方、かと思う。*「ことさらめき(特にそうであるように)」の「さ」は「いたう筆澄みたるけしき」という文脈のようだが、「筆澄みたるけしき」になるような歌という言い方で何かが想起出来る素養は私には無い。注釈にも参照歌が示されていないので、私には手掛かりが無い。だから中身は分からないながら上文の流れに沿って、この綴じ本の趣旨を「姫の教材」と規定すれば、「そばみたる(寄り集まった)ふることども(いくつかの古歌)」は「技巧を凝らしていない平易で率直な言葉遣いが寄り集まった古歌の数編」かと範囲を想定する。*「ただ〜ばかり」は「ちょうど見合うように」という言い方で、数篇の歌が列記されていたのなら「きっちり〜に揃えて」書かれていた、ように思う。*「もじすくな」は注に「『集成』は「仮名だけで書かず、漢字まじりにしたので、字数が少なくなっているであろう」と字数の意に解し、『完訳』は「ほとんど全部仮名で」と漢字の意に解す。」とある。『完訳』に従うが、もう少し言えば、「文字」は「(書いた)記号」であり、「名」は「(発音の)記録」だという認識が、この作者にはあるように思う。だから、「仮名(仮の記録)」に対する「真名(正式の記録)」であり、その「正式の記録」は「文字=漢字」に準拠するという言い方、かと思う。*この「驚きぬ」は「驚いた」のだろう。殿は宮に以前、独身者のあなたに夫婦の機微は分からない、とたしなめたくらいだから、宮が子供本の趣旨を心得ていたことに驚いた、のかも知れない。しかし、実際に目の前の子供の気持ちや状態が分かるのとは違って、子供向けの教材ということなら、子持ちの女房などに年頃の女の子に相応しそうな歌や字などを聞き調べれば分かることなので、宮がそうした助言を素直に聞き入れて写本をしたとしたら、却って殿のように親としての自覚を持って彼是と思案するよりも、今風のすっきりとした製品感があって、一見すると完成度が高いように見えたということは有り得る。そして、子供が本当に大事にするのは手作り感のある親の温もりだということも、モノに拠る。

「かうまでは思ひたまへずこそありつれ(これほど見事な出来栄えとは思っておりませんでした)。*さらに(これでは私など)筆投げ捨てつべしや(筆を投げ捨てるべきでしょうか)」*「さらに」は「加えて」という意の副詞としてではなく、本来の「さらむに(此は)」と読むべき、かと思う。

と(と殿は)、ねたがりたまふ(羨ましがりなさいます)。

「かかる御中に*面なくく下さ筆のほど(姫の御手本作りに参加なさるといふ、こうした名手の方々の御仲間に交じって臆面も無く執筆する字の上手さは)、さりともとなむ思うたまふる(そうは言っても其れなりに大したものかと我ながら自負しております)」*「面無し(おもなし)」は、此処では「面目ない」ではなく「遠慮がない」。「下す」は「筆を紙上に下ろして書く。執筆する。」と古語辞典にある。

など、戯れたまふ(宮も冗談を仰います)。

書きたまへる草子どもも(殿がお書きになった草子どもも)、隠したまふべきならねば(隠しなさるべき私信ではないので)、取う出(とうで、手元に取り出し)たまひて(なさって)、かたみに御覧ず(互いに相手の御手本を御覧になります)。

唐の紙の、いと*すくみたるに(とても硬質な紙に)、草書きたまへる(漢字の草書をお書きになってあるものを)、すぐれてめでたしと見たまふに(とても見事だと宮が御覧になると、その次に

は)、高麗の紙の、肌こまかに(きめが細かくて)和う(なごう、柔らかい)なつかしきが(手に馴染む紙の)、色などははなやかならで(色合いは地味だが)、なまめきたるに(味わい深いものに)、おほどかなる女手の(ゆったりした曲線の仮名文字の)、うるはしう心とどめて書きたまへる(姫を愛しく思って心を込めてお書きになってあるのは)、たとふべきかたなし(例え様も無く素晴らしい)。*「すくむ」はくこわばる。固い感じがする。>と古語辞典にある。

見たまふ人の涙さへ(御覧になる宮の感動の涙までが)、*水茎に流れ添ふ心地して(筆先に流れ添う気がして)、飽く世あるまじきに(見飽きることがないと思っていると)、また(今度は)、この*紙屋の色紙の(わが国の官製和歌用厚紙の)、色あひはなやかなるに(五色模様で色合いが派手なものに)、乱れたる草の歌を(崩し書きの草仮名の和歌を)、筆にまかせて乱れ書きたまへる(筆の勢いのままに書き流しなさってあって)、見所限りなし(見所満載です)。*しどろもどろに愛敬づき(その自由に動く一つ一つの線に引きつける魅力があって)、見まほしければ(隔々にまで目が離せない)、さらに残りどもに目も見やりたまはず(宮はとて他枚数に目を移そうと為さしません)。*「水茎(みづぐき)」は古語辞典に<弘法麦のこと>とあり<その地下茎を筆として用いた。>とあるが、Web 図鑑で海岸の砂地に生える写真を見ると「弘法麦(筆草とも)」の麦穂先自体が筆先のようにも見えた。また、「水茎」で<筆。筆跡。手紙。>を言う歌語的表現もあるらしく、「流れ添ふ」などは引き歌があるのかと思うような言い回しだ。*「紙屋の色紙」は「かんやのしきし」と読みがある。「紙屋」は「紙屋院(かみやいん)」のことで<平安時代、図書寮(づしよれう)に属した製紙所。山城国、北野の紙屋川畔にあり、官庁用の紙を漉(す)いた。かみや。かんや。かやいん。>と大辞林にある。「色紙」は<和歌・書画などを書く方形の厚紙。表に金銀箔などを散らすものもある。普通、大は縦六寸四分(約 19.4cm)・横五寸六分(約 17cm)、小は縦六寸(約 18.2cm)・横五寸三分(約 16cm)。>と大辞林にある。「しきし」の語の由来は<多くは五色の模様や、金・銀の砂子などが施されてある。(古語辞典)>ことに拠るのだろう。*「しどろもどろ」は注に<「よしとてもよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」(紫明抄所引、出典未詳)「まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」(古今六帖六、かるかや、三七八五)>とある。確かに、これらの引歌が選ばれていた可能性は高そうだ。というのも、「しどろ」はWeb「花 300」サイトの「チガヤ」ページの写真を参照した所、カヤの穂先が綿毛のようになって風に乗って種を運ぶことから<枝垂れて乱れた様子=自由な伸びやかさ>を言う、ようにも思えるからだ。「もどろ」は綿毛のもつれた様だろうか。いずれにしても、現代語のような否定語感は無さそうだ。「愛敬(あいぎやう)」は<愛らしさ=目を奪う魅力>。

[第六段 他の人々持参の草子]

左衛門督は(さゑもんのかみは)、ことことしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど(事を構えて格式ばった公文書風の字体ばかりを良しとして書いてあるが)、筆の*掟て澄まぬ心地して(筆の運びに率直さが無い印象で)、*いたはり加へたるけしきなり(功名心が増かった出来栄でした)。歌なども(中身の歌も)、ことさらめきて(如何にも其れらしく)、選り書きたり(権威筋のものを選んで書いていました)。*「掟て(おきて)」は<きまり、法則、形式>とあるが、字体については自分の趣味が無いのか見せないのか、多く公文書に採用されている権威筋のものを「好みて(趣向ではないのだから、評価の既に定まった安全なもので保身を求めて)」選んでであるとされているので、この「筆の掟て」は<書風>か<筆の運び>だろうが、趣向性は隠しているのだから<筆の運び>なのだろう。「澄む」は<濁りが無い、すっきりしている、滞らない>とあるが、「心地して(印象があって)」とあるので<すっきり=率直さ>と見る。*「いたはり」は「労り」の<氣遣い>ではなく、「功」の<骨折り、功勞、手柄、功績>のことらしい。

女の御は(をんなのおんは、御方たちがお書きになった御草子どもは)、*まほにも取り出でたまはず(私信ではないとは言え姫の為の家庭内のことなので、宮の前に全ては取り出しなさいません)。斎院のなどは(薫物合わせで仲を詮索された前斎院のものなどは)、まして取う出たまはざりけり(まして一切お見せなさいません)。 *「まほ」は「真面」でくまとも、真正面、完全なさま、十分なさま>とある。「まほにも」は<十分には、全ては>のようで、それをわざわざ言うのは前に「書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば」としたことに對しての言割りなのだろう。

葦手の草子どもぞ(葦手絵の遊び文字を書いた草子の数冊は)、心々に*はかなうをかしき(それぞれが自由な発想をしていて面白い)。宰相中将のは、水の勢ひ豊かに書きなし(川の流れを大きく書いて)、*そそけたる葦の生ひざまなど(その岸边に施された、穂先が毛羽立ったアシの生えている様子などが)、*難波の浦に通ひて(浪速津の葦原の景色に似通って)、こなたかなたいきまじりて(文字が彼方此方に入り混じって)、いたう*澄みたるどころあり(非常に冴えた着想が見えました)。また(一方で)、いといかめしう(非常に堅苦しく)、ひきかへて(趣向を変えて)、文字やう(文字の形様を)、石などのたたずまひ(石などの姿に)、*好み書きたまへる枚もあめり(見立ててお書きになった景色図もあるようです)。 *「はかなし」は<判然としない何かがある→その場限りで頼りない>という語感だが、この文では其れを肯定しているので<既成概念に捉われない自由な発想>という意味、なのだろう。 *「そそく」は<毛羽立つ>とあり、現代語の「そそける」も同意かと思うが、「注ぐ」という水の縁語を語源として<注いだ水が飛び跳ねるさま>という説明も一説にはあるらしく、「水の勢ひ」を受けた言い回しなのかもしれない。ともあれ、「花 300」サイトの「アシ・ヨシ」の写真で水辺の稲草の穂先が毛羽立っているのを改めて確認したし、それを図案化した絵柄もおよその見当は付く。 *「なにはのうら」は当時の京都人にとって最も代表的な葦原風景だったらしい。私などは吉原と聞けば浅草を思うクチだが、「難波の葦」で Web 検索すると、「草の名も所によりて変わるなり難波の葦は伊瀬の浜荻<菟玖波集(つくばしふ、1356 年成立)>と「なにはえの(難波江の)あしのかりねの(旅脚の仮寝の、葦の刈り根の)ひとよゆゑ(一夜を過ごしたから、一節があるから)みをつくしてや(身を尽くしてや、漂標としてや)こひわたるべき(恋ひ続けるだろう、水を渡れば良い)><皇嘉門院別当(くわうかもんみんのべったう)>がヒットして、当時の人の思いが伝わる。皇嘉門院は第 75 代崇徳天皇(在位 1123~1141)の中宮藤原聖子(きよこ)で、鳥羽上皇の院政下で近衛帝に讓位後の崇徳院が聖子の父である藤原忠通らの勢力に政治敗退する中で、近衛帝の養母たる聖子は厚遇されて「久安 6 年(1150 年)院号宣下を受け、皇嘉門院と号した。(Wikipedia)」とあり、この大喜利はその女別当(家政長)の歌ということだから、どちらもこの物語からはだいぶ後のもので直接の参照にはならないが、逆に言えば万葉の昔から歌に詠まれ続けて、こうして平安末期に至るまで当時の都人にとって難波の葦原が基本的には変わらない風景だったことが分かる。 *「澄む」は「行き交じりて」とあるのだから<すっきりした絵柄>と言っている訳ではないだろう。「澄みたるどころ」は<冴えた着眼点>かと思う。この「澄む」は、今回の草子作成に於ける殿の評価基準になっている言葉らしく、何となく政治背景を物語っていそうな気もする。 *「好む」は<好きに思う>でもあるが、何か<相応しいと判断する>でもあり、此処では後者だ。

「目も及ばず(参ったね)。これは暇いりぬべきものかな(これは労作だよ)」

と(と宮は)、興じめでたまふ(面白がってお褒めなさいます)。何事ももの好みし(何事にも凝り性で)、艶がり(えんがり、風流に遊びたがり)おはする親王にて(なざる皇子なので)、いとみじうめできこえたまふ(これらの葦手絵は本当にとっても気に入ってお褒め申しなさいます)。

[第七段 古万葉集と古今和歌集]

今日はまた(この日は更に殿と宮は)、手のことどものたまひ暮らし(写本の仕方の種類を論じ合って一日過ぎしなさり)、さまざまの*継紙の本ども(さまざまの巻物に仕立てた書のお手本類を)、選り出でさせたまへるついでに(殿が蔵書の中から選り出させなされたのに応じて)、*御子の侍従して(御子息の侍従を遣わして)、宮にさぶらふ本ども取りに遣はす(宮邸に所蔵する巻物手本類を取りに行かせます)。 *継紙(つぎがみ)は<料紙装飾の一技法。色や質の異なった二種以上の紙を継ぎ合わせて一枚の料紙としたもの。切り継ぎ・破り継ぎ・重ね継ぎなどがある。ぞくし。>と大辞林にあるが、大辞泉には<卷子本(かんとほん)・折り本などに用いる、継ぎ合わせた紙。>とも説明されていて、「卷子本」が<実際に書画を書く平面の料紙を糊で継がないで本格的な巻物状にしたもの>のことを言っているとしたら、「継紙の本」とは<巻物に仕立てた御手本写本>を示しているワケだし、渋谷・与謝野の両訳文もそのように解しているらしい。素養の無い私には分かり難い文だ。 *「御子の侍従」は「みこのじじゅう」と読みがあり<兵部卿宮の御子息の侍従>と訳があるが、特に注釈は無い。実子だとしたら、母君は誰なのか。宮は遊び女は多いが妻は居ない、という事だったかと思うが、子は居たのか。侍従は中務省の天皇近侍職名だが、王籍のまま役人勤めをしていたのか。歳はいくつか。何も分からない。

*嵯峨の帝の(能書家で名高い嵯峨天皇が)、『古万葉集』を選び書かせたまへる四卷(昨今の漢字の仮名変換で姫も参考になさるだろう万葉集の中から数篇の歌を選んでお書きあそばした四巻きと)、延喜の帝の(延喜の御世の醍醐天皇が)、『古今和歌集』を(定番の仮名手本である古今和歌集を)、唐の(大陸製の)浅縹の(あさはなだの、薄水色の)紙を継ぎ(紙を継がないで巻物にしたもので)、同じ色の濃き紋の綺の表紙(同じ色地に濃い糸で紋様を出した光沢織物を表紙にして)、同じき玉の軸(同じ色の玉石を飾り付けた軸木に)、緞の(だんの、色違いの糸を段状の線になるように並べ置いてから)唐組の(からくみの、菱形模様編みに組んだ)紐など(結び紐などが)、なまめかしうて(優美で)、巻ごとに御手の筋を変へつつ(巻きごとに御筆跡の書風を変えつつ)、いみじう書き尽くさせたまへる(見事に書き仕上げあそばしたそれらの写本を)、大殿油短く参りて御覧ずるに(部屋灯りを近付けて御覧になっては)、 *「嵯峨の帝の古万葉集を選び書かせたまへる四巻」は<嵯峨天皇が万葉集から幾つかの歌を選んで写本為さった四巻>という言い方に見えるが、これを真に受けると、嵯峨天皇自身の写本が宮邸に所蔵されていた、ということのようで、此処に居る源氏殿と弟宮が正に王家の人間として、架空話とは言いながら、その実態に迫る形で語られている設定に改めて驚く。と同時に、余りにも私の生活感とかけ離れた世界なので、この文意というか作者の意図するものの感覚が掴めず、何か手懸りになりそうな参照サイトがないかと Web 検索したら、「「嵯峨帝筆『古万葉集』」に関する一考察」という公開文書が「日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No. 11, 383-395(2010)」掲載サーバにあった。執筆提供者は日本大学大学院総合社会情報研究科の吉田紀恵子という方で、文末に「紀要」管理編集者であろう人の受付日が(December31, 2010)で、インターネット公開日が(February8, 2011)とクレジットされているので、最新の考察文らしい。その内容は示唆に富んでいるように思えたが、私にはそれらを検証できる素養がないので盲目的に従って、とは言え、私なりに妥当性が高そうだと思う箇所の都合の良い摘まみ食いだが、概要把握を試みたい。先ず、「『古万葉集』とは、万葉仮名で書記され、最初の日本文学として八世紀に成立した和歌集『万葉集』を言う。平安時代、『新撰万葉集』、『続万葉集』という呼称があり、それらと区別する為に『万葉集』を『古万葉集』と呼んだ。」(2/13)とあり、「古万葉集」という言い方は、当時の他の諸家編の「万葉集」の語を冠した歌集書物に対するもので、今で言う一般的な奈良後期成立の<万葉集>を指す、とのこと。ただし、その「万葉集」原本は伝存せず、どのように表記されたのかは不明である。」(4/13)とされ、写本に付いても「既に、平安時代、訓法を考えなければならないほど『万葉集』の万葉集仮名の複雑

な用字法は問題になっていた。」(5/13)とあり、漢学の能書家とされていた嵯峨帝が明石姫の手習い本となるような<万葉集の仮名本>を写本したとは考え難い、と吉田氏は論じる。そこで吉田氏は紫式部の意図として、実際に明石姫の手習い本に成り得たのは「小野道風から始まり藤原行成によって完成された和様書道時代の書であり、女性も享受できる和やかな書風、即ち、嵯峨天皇時代の厳しい唐様と相対する書風の『万葉集』調度手本と思われる。」(12/13)とした上で、「一般的な教養書である調度手本と一線を画す為、物語の中とは言え、平城天皇と所縁が深く、能筆として名高い嵯峨天皇を筆者とする「嵯峨帝の古万葉集」即ち「嵯峨帝筆『古万葉集』」を設定したと考えられる。」(12/13)とまとめている。従って、その意図に沿って補語する。なお、「延喜帝の古今和歌集」の言い方の意図については同考察文にある、「『古今和歌集』は醍醐天皇の下命により延喜五年(905年)頃成立した最初の勅撰和歌集であり、九世紀末から十世紀初頭に完成し流布していたと言われる女性も読み書き可能な「かな(女手)」表記の最初の和歌集である。そして、村上天皇(在位 946~967)の女御芳子の逸話でも知られるように平安貴族社会の女子教育の中心となる歌集である。従って、醍醐天皇筆『古今和歌集』の調度手本は明石の姫君への最高の贈り物といえる」(1/13)という吉田氏の解釈に、是も従う。

「尽きせぬものかな(凄いいもんですね)。このころの人は(最近の人は)、ただかたそばをけしきばむにこそありけれ(ただ一部分を工夫してきているだけなんです)」

など(などと殿は)、めでたまふ(お褒めなさいます)。やがてこれほどどめたてまつりたまふ(そのまま宮はこの万葉集と古今集の写本をこちらに献上なさいます)。

「女子などを持てはべらましにだに(女の子を持っていたにしても)、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを(あまり出来の良くない子であれば与えるべきではない尊い先帝直筆の写本どもを)、まして(まして女の子の居ない我が家に置いている)、朽ちぬべきを(役に立たないまま廃れてしまいますので)」

など聞こえてたてまつれたまふ(などと申して差し上げなさいます)。侍従に(殿は御返しに侍従に)、唐の本などのいとわざとがましき(唐国の原書などのそれは特上品を)、沈の筥に入れて(貴重な沈木の箱に入れて)、いみじき高麗笛添へて(非常に立派な高麗笛を添えて)、奉れたまふ(差し上げなさいます)。

また(その他にも)このころは(この入内を控えた三月は)、ただ仮名の定めをしたまひて(殿はただただ仮名手本の選定をなさっていて)、世の中に手書くとおぼえたる(当代の能筆と評判の高い)、*上中下の(かみなかしの、階級の違う)人びとにも(多様な人たちに)、さるべきものども思しはからひて(多様な手本が揃うことを期待なさって)、尋ねつつ書かせたまふ(依頼をして写本を書かせなさいます)。 *「上中下」は身分の差のことなのだろう。印刷本が無い当時は、実際に誰かが写本した以外の本は無い。多様な本を集めようとするれば、多様な人びとに写本して貰う他は無い。ただ、知識の集約は即ち情報収集なので、その高度なものは権威家が有する。最たるものは唐の原書だろうし、それに順ずる資料も正に王家や源氏家や藤原家にある筈だ。下々に高度なものを求めることは出来ない。では何故、「中下」にまで写本作成を依頼するのか。確かなことは、文部行政上の現状把握調査には成り得る、という点だ。「上中下」はそれぞれに接し得る知識・文献・人脈が異なる。当然に下の者ほど其の範囲は制限される訳だが、其の範囲の中で実際に各人が有用と考える文言は、実際に書き出させて見ないと特定出来ない。そして、実際に各人各層に浸透している歌や名言を知ることは、それがそのままある程度の国民の意識調査になる。それに、それ自体が知識の集約でもある訳

だが、知識の発想や着眼は「中」にも「下」にも新しいものが期待できるので、調査という視点以外にも、提出された写本類それぞれの内容形様は、正に読み手の力量次第だが、それ自体が興味深い。

この御管には(姫の手習い用の御本箱には)、立ち下れるをば混ぜたまはず(出来の悪いものは入れなさらず)、わざと(はっきりと)、人のほど(各身分や)、品分かされたまひつつ(家柄ごとに区別して)、草子(綴じ本や)、巻物(巻き物の)、皆書かせたてまつりたまふ(あらゆる種類を書かせたものを嫁入り道具にお持ち頂き申しなさいます)。

よろづにめづらかなる御宝物ども(どれもが珍しい御宝物ばかりで)、人の朝廷までありがたげなる中に(唐国の宮殿にさえ無いような立派な嫁入り道具の中でも)、この本どもなむ(この手本類こそが)、ゆかしと心動きたまふ若人(最も欲しいと心を動かしたさる若い人が)、世に多かりける(都には多かったです)。

御絵どもととのへさせたまふ中に(姫に差し上げ為さるいくつもの御絵を整理なさる中に)、かの『須磨の日記』は(殿はかの『須磨の日記絵』は)、末にも伝へ知らせむと思せど(子孫にも伝え知らせようと御思い為さるが)、「今すこし世をも思し知りなむに(姫がもうすこし長じて世の中をお分かりになってから)」と思し返して(と思い直しなさって)、まだ取り出でたまはず(まだ文庫から取り出しなさいません)。